日本産恙虫類の脚剛毛式にみられる種及び群特異性と発
育期特異性について：佐々学 Sasa, M. : Species-,
group- and stage-characters in the leg chaetotaxy of
the Japanese trombiculid mites

恙虫類の分類学上の標徴としては、幼虫では背甲板及びその附属器官の形状、胴部や口器の毛の数、配列、形などが主として用いられ、一部には“脚の特殊な毛”の有無、数、形などが利用されて来た。若虫、成虫についても同様である。そして各期の脚剛毛式はかなり複雑な性状を示し、観察には手間がかかるので、これまで十分に検討されたことがなかった。筆者は、各期の脚について、単に“特殊な毛”にのみ注目する立場をとらず、全部の毛の配列、性状を検討することによつて、その起源をつきとめ、とくに恙虫類の系統発生的な表徴をつきとめる手がかりに利用出来ないかとの意図のもとにこの研究に着手し、幼虫については主要種の検討を終つて、印刷した。今回はそれをさらに若虫、成虫におしすすめ、脚剛毛式が同一種内の幼虫、若虫、成虫でどうか(発育期特異性)、種又は、亜属、属、亜科などの群の単位でどのような共通性、相違性を示すかを検討した。

恙虫類の脚の毛の配列及び形状の特徴は、各種の幼虫、若虫、成虫についてほぼ一定し、これによつても期を区別しうる。また、同一個体においても第1, 2, 3 (及び4)脚の各節それぞれについて特徴ある剛毛式を示す。これらの毛の起源は概ね通常毛と知覚毛の2種類に区分しうる。それぞれが種により、また期によつていろいろな変型を示し、たとえば単状長毛の多くは通常毛の変型であり、知覚棒 sensory rod は知覚毛の変型である。この考え方から各期の各脚各節の毛の数、性状を数字で表現し比較する脚剛毛式表 leg chaetotaxy formulae を考案した。また、日本産主要種について剛毛式図も完成した。

(伝研・寄生虫)

紙 上 発 表

横浜市に発生したキホソバについて：石井襄二・原田文雄 Ishii, J. & Harada, F. : Ecological studies on a poisonous caterpillar *Eilema yokohamae* Daniel, recovered from the suburbs of Yokohama City

1957年7月下旬から8月上旬にかけ、戸塚区内で不明毛虫による被害届が多数あり、調査の結果キホソバ(昆虫学会々員井上寛氏の同定によれば *Eilema yokohamae* Daniel ヤネコケガとのことであるが、ここでは便宜上

キホソバとしておく)幼虫による被害であることが判明し、その発生状況および生態の一部を知り得た。幼虫による被害の主なものは天井から糸を出して垂れ下り人体露出部に附着して皮膚炎を起させ、洗濯物に附着してふれた人を刺し、夜間活動がひどく安眠出来ない等である。調査方法は発生状況の観察、アンケートによる調査、室内飼育観察を平行して行つた。発生場所は市街地から大分はなれた社宅、官舎、寮の35戸、1棟で15年以上経た老朽木造家屋が大部分であり、被害発生家屋自身には苔が生え、所々木材の腐蝕が見られた。幼虫は朝夕多数発見出来るが日中は難しく、陽の射さない場所にひそむことが多い。一部改築又は修繕した家屋、ペンキ、防腐剤塗の家屋では発生がない。アンケートによれば、5~6年以前から一部で発生し、近年特に発生個所及び被害が増えている。発生時期は場所によつて異なるが、被害報告の最初は6月下旬つまり苔の発育が盛んとなる頃、最後は11月5日である。12月、1月、2月に幼虫は発見されず、3月に2匹、4月に2匹屋内で活動している終令に近い幼虫を発見した。8月下旬採集した幼虫の飼育成績では、9月1日蛹化、24日産卵(78コ)成虫は25日死亡、10月1日ふ化、9日脱皮し2令となり、その後更に16日、23日および11月3日にそれぞれ脱皮を行い、19日営巢、21日蛹化、12月30日羽化し1月4日死亡した。飼育途中幼虫のまま死亡するもの多く、成功は1例にすぎない。コマユバチ寄生のもの2例あり、北海道大学渡辺氏の同定によれば *Meteorus* sp. のことである。

(神奈川県衛研)

三重県におけるブユの分布に関する研究(第I報) 三滝川上流のブユ相について：広正義 Hiro, M. : On the distribution of black flies in Mie Pref. The black fly fauna of the upper stream of Mitaki-gawa

三重県の農山村地帯におけるブユの被害が相当はげしいことは度々報ぜられているがその分布についての詳しい報告は未だみられない。著者は1957年4月より本県を北勢、中勢、南勢、伊賀志摩、紀北、紀南の7地区に分けて調査を行つて来たが今回は第I報として北勢地区に属し鈴鹿山系御在所岳(標高1,209m)より発する三滝川の上流部におけるブユ相について報告する。本水系の源流並びに上流部は花崗岩からなり川底は小石、砂又は礫が多く急流及び瀑布型を呈し水は清透で兩岸はブナの原始林を始めとし各種の潤葉樹でおおわれている。調査方法として1,980mの源流附近より平野部の水田地帯にいたる間の本流、支流に30地点を設けその個所におけ